

方言接触による授与動詞体系の変容 : FPJD調査より

著者	日高 水穂
雑誌名	国立国語研究所論集
号	11
ページ	11-24
発行年	2016-07
URL	http://doi.org/10.15084/00000838

方言接触による授与動詞体系の変容

——FPJD 調査より——

日高水穂

関西大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

日本語の授与動詞の語彙体系を〔遠心性授与動詞／求心性授与動詞〕のように表すとすると、近畿地方を中心とした「中央部」の方言では〔ヤル／クレル〕の語彙体系を発達させてきているのに対し、中部地方以東や九州地方以南の「周辺部」の方言では〔クレル／クレル〕を維持するものがある。この〔ヤル／クレル〕と〔クレル／クレル〕が接触する地域では、本動詞用法においては〔クレル／クレル〕が維持されるのに対して、補助動詞用法では〔ヤル／クレル〕の対立を生じている場合がある。この授与動詞体系の方言接触による変容の諸現象と地理的分布を、FPJD 調査の結果により検証する*。

キーワード：授与動詞, ヤル, クレル, 方言接触

1. はじめに

現代日本語（標準語）の非敬語形の授与動詞（与え手が主格になる授受動詞）の語彙体系は、遠心的方向の授与（与え手に話し手の視点を置く授与）をヤルが表し、求心的方向の授与（受け手に話し手の視点を置く授与）をクレルが表すという人称的方向性による対立を成す。本稿では、前者を遠心性授与動詞、後者を求心性授与動詞と呼び、現代日本語（標準語）の授与動詞の語彙体系〔遠心性授与動詞／求心性授与動詞〕を〔ヤル／クレル〕のように表すことにする。

日本語諸方言を見渡してみると、〔ヤル／クレル〕の語彙体系は、主に近畿・中国・四国地方に分布し、この地域と東側で接する中部地方以東と西側で接する九州地方以南は、クレルを人称的方向性の区別なく用いる〔クレル／クレル〕が分布する地域となっている。日本列島を3分割するこの分布は、方言分布のタイプにおいて周囲分布（ABA分布）とみなされるもので、そこから近畿・中国・四国地方においても、かつては〔クレル／クレル〕が行われていたことが推定される（日高2007）。

* 本稿の一部は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国調査（Field Research Project to Analyze the Formation Process of Japanese Dialects: FPJD）」（プロジェクトリーダー：大西拓一郎）の研究成果である。また、JSPS 科学研究費補助金基盤研究（A）「方言分布変化の詳細解明—変動実態の把握と理論の検証・構築—」（23242024 研究代表者：大西拓一郎）、基盤研究（A）「日本語の時空間変異対照研究のための『全国方言文法辞典』の作成と方法論の構築」（26244024 研究代表者：日高水穂）の助成を受けている。本稿は、2015年9月27日に国立国語研究所で開催された「方言の形成過程解明のための全国方言調査」公開研究発表会言語地理学フォーラムにおいて、「接触」による方言変容の諸現象」と題して行った口頭発表の、主に後半部分で論じた内容を加筆・修正したものである。発表時に有益なコメントをくださった方々に感謝申し上げる。

文献でたどる中央語（京都語）史においても、中古以前はクレル（クル）が人称的方向性の区別なく用いられており、〔ヤル／クレル〕は中世以降に新しく成立した語彙体系であることが判明しており（古川 1995, 森 2011）、この推定の正しさが補強される。

ところで、中央語における〔クレル／クレル〕から〔ヤル／クレル〕への変化は、授与動詞の語彙体系においては、単純な語彙体系が複雑な語彙体系へと変化したことを意味する。言語変化の一般的な傾向として、複雑な表現体系が単純化するという方向の変化が多く認められるが、授与動詞の語彙体系の場合は、一見これに反する方向の変化が生じたことになる。これは、授与動詞の表現体系が、単なる語彙の体系にとどまらず、敬語の表現体系とも密接に関わる対人的配慮の表現体系の一角を成すことによる。社会構造と対人関係のあり方が変わることによって、待遇表現の運用方法が変わるのに連動して、授与動詞の語彙体系は単純なものから複雑なものへと変化してきたのである。現代日本語諸方言の授与動詞体系の変異は、こうした中央語に生じた歴史的な変化が地理的分布に反映したものであると言える。

ここで、方言接触による表現体系の変容の諸現象を整理するための枠組みを示す。日高（2016 予定）では、以下の2つの条件の組み合わせで、方言接触のパターンを考えた。

- (1) 2つの方言間における「優劣」：一方の方言がもう一方の方言に対して社会的な威信を持つかどうか。
- (2) 2つの表現体系の単純さ：一方の表現体系がもう一方の表現体系に対して単純な体系であるかどうか。

(1) の条件からは、社会的威信を持つ優勢な方言の要素が劣勢な方言へと伝播し、受容されることが想定される。この条件を、言語変化を促進する社会的動機づけとみなす。一方、(2) の条件からは、単純な表現体系が複雑な表現体系に影響を及ぼし、複雑な表現体系が単純化することが想定される。この条件を、言語変化を促進する言語的動機づけとみなす。日高（2016 予定）で述べたように、(1) (2) の条件によって方言接触による言語変容が促進されるのは、当該の2方言が共通の言語文化圏の範囲内にある（方言区画に反映するような多くの共通の言語特徴をもとも持っている）ことが前提条件となる。

上記の2つの条件を組み合わせると、方言Xの表現体系xと方言Yの表現体系yの関係として、次のようなパターンが考えられる¹。

- (3) 「方言Xと方言Yの優劣に差がない」かつ
 - (a) 「表現体系xと表現体系yの複雑さに差がない」
 - (b) 「表現体系xのほうが表現体系yよりも単純」

¹ 日高（2016 予定）では、条件表現と可能表現という文法項目の方言接触による変容を扱ったため、本稿の「表現体系x」「表現体系y」を「文法項目x」「文法項目y」としているが、ここでの「表現体系」と「文法項目」はともに語彙・文法的な意味と関わる言語の部分体系を指すものである。

- (4) 「方言 X のほうが方言 Y よりも優勢」かつ
- (a) 「表現体系 x と表現体系 y の複雑さに差がない」
 - (b) 「表現体系 x のほうが表現体系 y よりも単純」
 - (c) 「表現体系 x のほうが表現体系 y よりも複雑」

上記の組み合わせでは、(3a) は、方言接触を契機とした言語変化が促進される社会的動機づけ、言語的動機づけともに希薄であって、方言 X・Y の表現体系 x・y に接触による変化は生じにくいと予想される。(3b) は、社会的動機づけは伴わないが、方言 Y が方言 X の表現体系 x を受容し表現体系 y に変化が生じる言語的動機づけは存在する。(4a) は、言語的動機づけは伴わないが、同様の変化が生じる社会的動機づけは存在する。(4b) は、社会的動機づけ、言語的動機づけともに、同様の変化を促進するものとなり得る。それに対して、(4c) は、社会的動機づけと言語的動機づけが相反する方向に変化を促す組み合わせとなっている。以下で取り上げる授与動詞の語彙体系の方言接触は、この (4c) タイプということになる。

現代日本語諸方言の授与動詞の語彙体系は、上述したような中央語史の表現体系の変遷を反映して、近畿地方を中心とした「中央部」が複雑な体系に移行した後も、中部地方以東や九州地方以南の「周辺部」では単純な体系が維持される、という地理的分布を生じている。このような地理的分布において、「中央部」の複雑な体系〔ヤル／クレル〕と「周辺部」の単純な体系〔クレル／クレル〕が接触することによって生じる、方言変容の様相を探ることが本稿の目的である。

2. 先行研究に基づく授与動詞体系の変容の諸現象

2.1 本動詞用法の方言接触による変容

まず、本動詞として用いられる授与動詞の語彙体系の地理的分布を概観しておく。

国立国語研究所（編）（1967）『日本言語地図 2』（以下 LAJ）の下記の分布図をもとに、授与動詞の語彙体系の地理的分布を整理すると、次頁の表 1 のようになる（日高 2002）²。

- ・ LAJ73 図「やる」（遠心性授与動詞・本動詞用法）
- ・ LAJ74 図「くれる」（求心性授与動詞・本動詞用法）

表 1 では、遠心性動詞と求心性動詞の形式の対立のない語彙体系を A 類、対立のある語彙体系を B 類としている。表では A 類を上、B 類を下に配置した。また、A 類の 1～5、B 類の 1～3 は、それぞれ中央語からの伝播を考えるうえで重要なクレル、ヤルを含む語彙体系を上配置し、それ以外の特殊語形を含む語彙体系を下に配置している。

² 分布の詳細は、LAJ73 図・74 図をもとに地点ごとの回答パターンを整理した日高（2007）掲載の「授与動詞総合地図」を参照されたい。

表1 授与動詞の語彙体系の地理的分布 (日高 2002: 170)

沖縄	九州	中国	四国	近畿	中部	関東	東北	北海道
A1	A1	B1	B1	B1	A1	A1	A1	A1
A4	A2	B2			B1	B1	B3	A3
A5	B1					B3		B1

- (A) 1 [クレル／クレル] …中部地方以東, 九州南西部以南
 2 [ヤル／ヤル] …九州中央部
 3 [ダス／ダス] …北海道沿岸南部
 4 [トラス／トラス] …沖縄県
 5 [エラス／エラス] …沖縄県
- (B) 1 [ヤル／クレル] …九州北東部から関東地方, 北海道内陸部
 2 [ヤル／ヨコス] …山陰地方
 3 [ダス／クレル] …北関東地方, 秋田県男鹿地方

表1で示した語彙体系のうち, ヤルとクレルのみが関わるのが, (A1) [クレル／クレル], (A2) [ヤル／ヤル], (B1) [ヤル／クレル] である。九州方言域に見られる (A2) [ヤル／ヤル] は, 「中央部」から伝播してきた [ヤル／クレル] が「周辺部」の [クレル／クレル] と接触した際に, 人称的方向性による語彙対立を持たないという表現体系を維持しつつ, 授与動詞としてヤルを用いるという表現形式を受容することによって生じたものであると考えられる。この現象は, 優勢な方言 X の複雑な表現体系 x が劣勢な方言 Y の単純な表現体系 y に与える影響として, 表現形式のみの受容にとどまり, 表現体系そのものは維持された例と言える (日高 2008)。

一方, 東日本に目を転じてみると, 中部地方から東北地方にかけて, (A) タイプの語彙体系と (B) タイプの語彙体系が併存して分布することがわかる。この地域においては, LAJ73 図で遠心性授与動詞としてクレテヤルを用いる地点が散在しており, 補助動詞用法で [ヤル／クレル] の対立が生じていることがうかがわれる。

2.2 補助動詞用法の方言接触による変容

表1は, 本動詞用法で使用される授与動詞の語彙体系の地理的分布を示したものであるが, [ヤル／クレル] と [クレル／クレル] が接触する地域では, クレルの遠心的方向用法が衰退していくプロセスとして, 以下の構文的制約が生じている (日高 1997, 2007)。

- (5) クレルの遠心的方向用法の衰退における構文的制約
- (a) 現場性制約: 発話現場依存的表現である提供文 (聞き手に対する直接的な授与の意志表現) の方が, 非現場的表現である叙述文 (第三者に対する授与の叙述表現) よりクレルの遠心的方向用法を残しやすい。
- (b) 文法化制約: ヤルに対して実質的意味によって対立する本動詞用法の方が, 機能的意味によって対立する補助動詞用法よりもクレルの遠心的方向用法を残しやすい。

(5b) の制約は, 本動詞用法と補助動詞用法の非対称現象として理解される。[クレル／クレル] 使用方言が, [ヤル／クレル] を受容するにあたり, 本動詞では旧来の用法が維持されるのに対

して、補助動詞では新しい用法が取り入れられ、結果として、授与動詞を人称的方向性によって運用する表現体系を獲得するに至ったものと言える。

こうした混交体系がどのような地理的な分布を成すかを、クレルの遠心的方向用法の変化型に着目して見ていく。

まず、(5) の制約に基づき、クレルの遠心的方向用法の変化型を整理すると、表 2 のようになる。

表 2 クレルの遠心的方向用法の変化型

		(1)	(2)	(3)	(4)
(a)	旧用法	○	○	○	○
(b)	(b1) 提供文・本動詞残存複合型（初期）	○	○	○	×
	(b2) 提供文残存型	○	○	×	×
	(b3) 本動詞残存型	○	×	○	×
	(b4) 提供文・本動詞残存複合型（末期）	○	×	×	×
(c)	新用法	×	×	×	×

※いずれにも当てはまらないものは「その他」とする。

- (1) お孫さん（/子供/弟/妹）に「おまえにこの本をクレル」〈提供文・本動詞用法〉
- (2) お孫さん（/子供/弟/妹）に「おまえにこの本をヨンデクレル」〈提供文・補助動詞用法〉
- (3) 家の人に「昨日は孫（/子供/弟/妹）の誕生日だったので、本をクレタ」〈叙述文・本動詞用法〉
- (4) 家の人に「昨日は孫（/子供/弟/妹）に本をヨンデクレタ」〈叙述文・補助動詞用法〉

移行用法のうち、(b2) の提供文残存型は現場性制約がより強く働いたもの、(b3) の本動詞残存型は文法化制約がより強く働いたもの、(b1) (b4) の複合型は2つの制約が複合的に影響しているものと言える。

次頁の図 1 は、この変化型の動態を把握するために、1995～2003年に各地域で実施した質問票による多人数調査（若年層は自記入式アンケート法、老年層は面接法）の結果を示したものである（日高 2007）。

提供文残存型は、富山・岐阜の老年層、岐阜の若年層に多い。富山の若年層はほぼ新用法となっていることから、現場性制約による移行用法は、世代間で継承されるような安定性のある表現体系を成すには至っておらず、東日本の〔クレル/クレル〕使用地域のうち、〔ヤル/クレル〕使用地域により近接している地域に、一時的に生じた現象であると見られる。一方、本動詞残存型は、山形から長野までの若年層および鹿児島島の若年層に高い割合で認められる。これらの地域では、老年層への聞き取り調査でも、本動詞残存型の回答が見られることから、文法化制約はより普遍性の高い制約であり、これによって生じた表現体系は、世代間で維持されるような比較的安定したものとなっている可能性が高い。

本動詞残存型とは、本動詞用法では〔クレル/クレル〕が維持され、補助動詞用法では〔ヤル/クレル〕の対立が生じているという表現体系である。この現象は、優勢な方言 X の複雑な表現体系 x が劣勢な方言 Y の単純な表現体系 y に与える影響として、2つの表現体系の混交体系を生み出した例と言える。

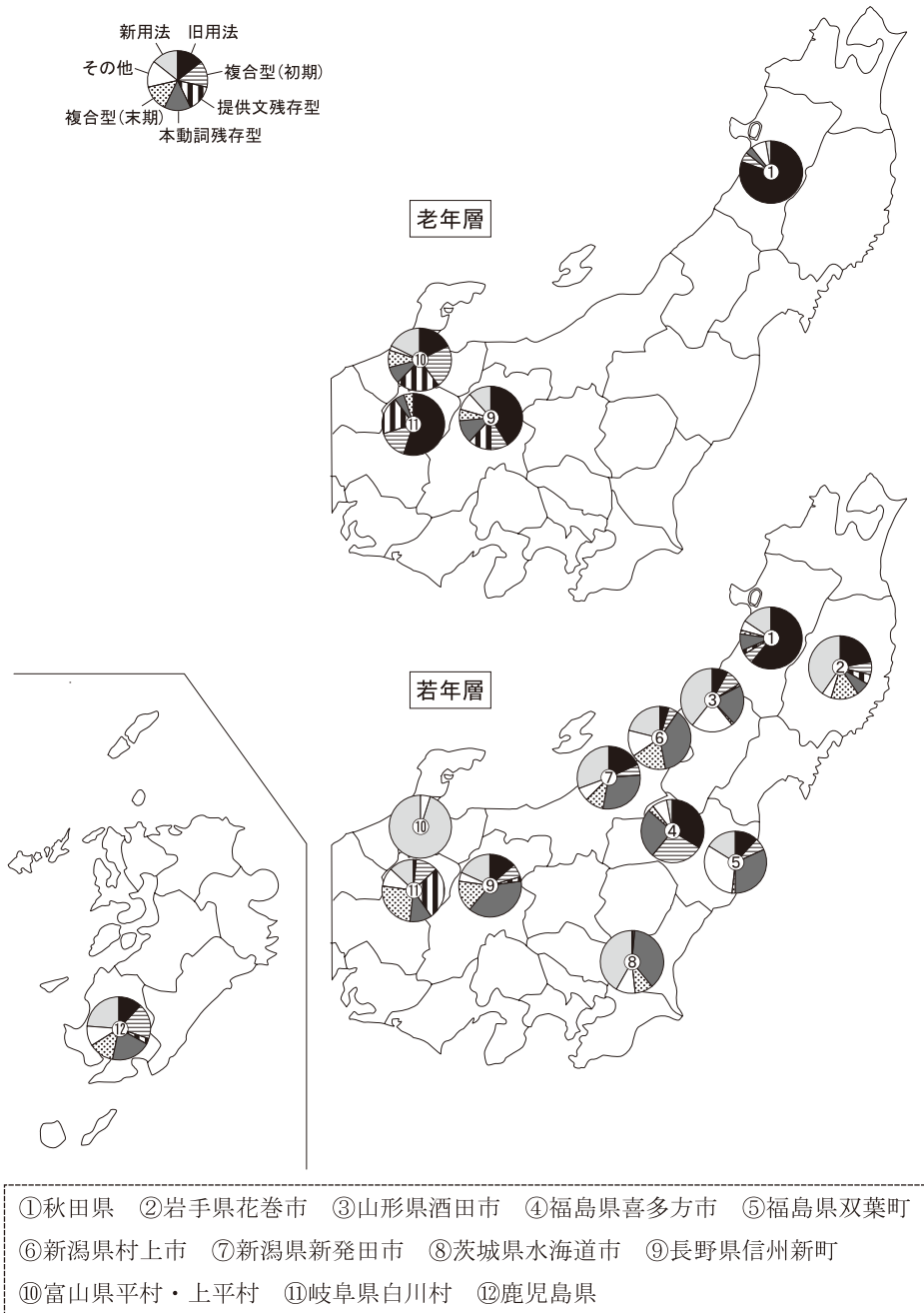


図1 クレルの用法の変化型の地理的分布 (日高 2007: 330)

3. FPJD 調査による混交体系の地理的分布

2節では、授与動詞体系の方言接触による変容の現象として、すでに筆者がこれまでの調査研究によって明らかにしてきた現象を見てきた。このうち2.2で取り上げた(5b)の文法化制約は、

接触地域の授与動詞体系において、本動詞用法と補助動詞用法に非対称が生じていることを意味するものであった。2.2 で取り上げた調査は、クレルの用法に着目したものであるが、授与動詞の表現体系を問題にする場合、在来体系の要素であるクレルの用法の維持・変容は、外来体系の要素であるヤルの用法との関係によって説明されるべきものである。また、2.2 の調査は、調査地点を絞った上での多人数調査によるものであるため、接触による授与動詞の混交体系の地理的分布の詳細は明らかではない。

授与動詞を取り上げた全国方言分布調査としては、2.1 で見た LAJ73 図・74 図のほかに、国立国語研究所（編）（2002・2006）『方言文法全国地図 5・6』（以下 GAJ）に下記の分布図が収録されている。

- ・GAJ263 図「(孫に本を) やった」(遠心性授与動詞・本動詞用法)
- ・GAJ264 図「(犬に餌を) やった (か)」(遠心性授与動詞・本動詞用法)
- ・GAJ266 図「(おれにたばこを 1 本) くれ」(求心性授与動詞・本動詞用法)
- ・GAJ319 図「(これをあなたに) あげましょう」(遠心性授与動詞・本動詞用法)

これらはいずれも本動詞用法の分布調査であって、本動詞用法と補助動詞用法との非対称現象を確認することはできない。そこで、国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「方言の形成過程解明のための全国調査」(以下 FPJD) では、下記の調査項目を設定し、遠心性授与動詞において、本動詞用法と補助動詞用法の非対称現象が生じる際の表現体系のパターンと地理的分布を把握することを試みた³。

- ・FPJD・G-097 「(孫に本を) やる」(遠心性授与動詞・本動詞用法)
- ・FPJD・G-098 「(孫に本を) 読んでやる」(遠心性授与動詞・補助動詞用法)

次頁からの図 2 は FPJD・G-097、図 3 は FPJD・G-098 の調査データに基づく分布図である⁴。この図 2、図 3 を概観する限りでは、本動詞用法においても、補助動詞用法においても、「中央部」に〔ヤル／クレル〕、「周辺部」に〔クレル／クレル〕が分布するという地理的分布が確認されるところにとどまりそうである。

そこで、図 4 では、ヤル、アゲル、クレルおよび複合授与動詞形クレテヤルが用いられている回答について、両項目のデータの地点ごとの組み合わせを整理し、遠心性授与動詞の本動詞用法と補助動詞用法の表現体系の地理的分布を示した⁵。これによると、中部地方以東と九州地方の〔ヤル／クレル〕と〔クレル／クレル〕が接触する地域に広く、ヤル・アゲル類とクレル類が併用される混交体系(図 4 の凡例の太枠内)が分布することが確認できる。

³ 本調査項目の設定には、筆者自身が携わっている。

⁴ 大西拓一郎（編）（2016 予定）に収録。なお、当該項目の作図・解説は日高が担当した。

⁵ 図 4 では、ヤル類とアゲル類は、いずれか一方が使用されていれば、ヤル・アゲル類にまとめている。



図2 孫に本をやる〔遠心性授与動詞・本動詞用法〕(FPJD・G-097)



図3 孫に本を読んでやる〔遠心性授与動詞・補助動詞用法〕(FPJD・G-098)

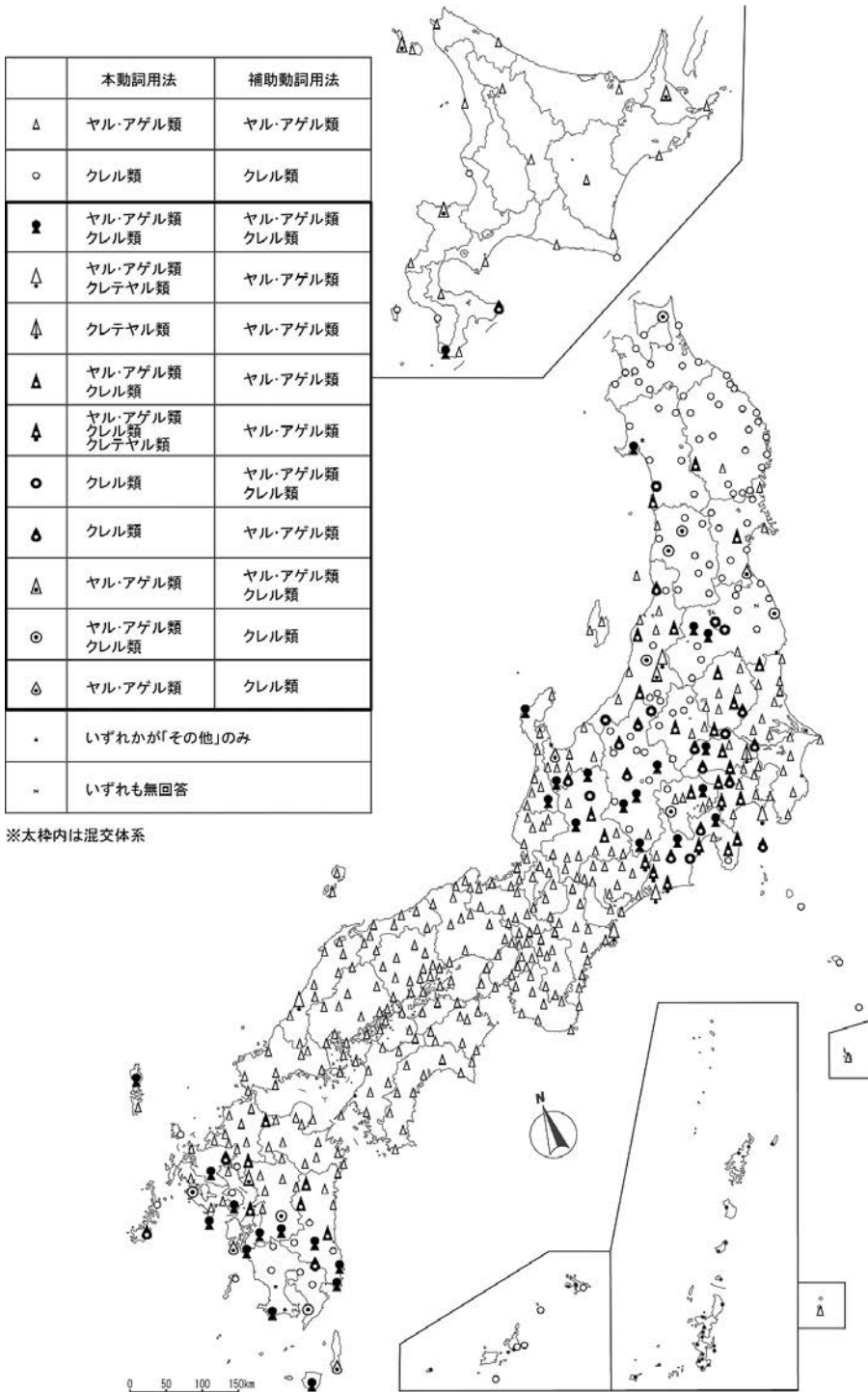


図4 遠心性授与動詞の表現体系の地理的分布 (FPJD・G-097/098の総合図)

表3は、遠心性授与動詞の混交体系を、在来体系の要素（クレル類）の変容段階と外来体系の要素（ヤル・アゲル類）の変容段階の組み合わせによってタイプ別に整理し、回答地点数を示したものである。

表3 遠心性授与動詞の混交体系

在来体系の要素（クレル類）の変容段階	外来体系の要素（ヤル・アゲル類）の変容段階	分類	本動詞用法	補助動詞用法	九州	北海道・東北・関東・中部
維持	受容	A	ヤル・アゲル類 クレル類	ヤル・アゲル類 クレル類	12 (44.4%)	17 (22.4%)
本動詞 残存型	補助動詞 先行型	B1	ヤル・アゲル類 クレル類 (クレテヤル類)	ヤル・アゲル類	6 (22.2%)	25 (32.9%)
		B2	クレル類	ヤル・アゲル類 クレル類	0 (0.0%)	8 (10.5%)
		B3	クレル類	ヤル・アゲル類	3 (11.1%)	14 (18.4%)
補助動詞 残存型	本動詞 先行型	C1	ヤル・アゲル類	ヤル・アゲル類 クレル類	1 (3.7%)	4 (5.3%)
		C2	ヤル・アゲル類 クレル類	クレル類	3 (11.1%)	6 (7.9%)
		C3	ヤル・アゲル類	クレル類	2 (7.4%)	2 (2.6%)
地点数合計					27	76

文法化制約によって生じるB型（B1～B3）は、回答地点数も多く、その大部分はヤル・アゲル類を完全受容した〔ヤル／クレル〕地域の中に分布していることから、〔クレル／クレル〕が〔ヤル／クレル〕を受容する過程において、比較的安定した表現体系を成すものようである。

それに対してC型（C1～C3）は、回答地点数も多くなく、分布状況も接触地域全域に散在している、というものである。言語接触の過程で生じた一時的な回答とみなしてよいだろう。

中部地方以東と九州地方を比較すると、中部地方以東の混交体系はB型がもっとも多く、その回答地点も静岡から関東北西部にかけてまとまった分布を成している。それに対して九州地方では、B型よりもA型が多く、B型の回答地点もまとまった分布を成すものではない。B型が安定した表現体系を成す傾向は、〔ヤル／クレル〕と〔クレル／クレル〕の接触地域のうち、東側に位置する中部地方以東において顕著に起きていることがわかる。

4. 方言接触のパターンから見る授与動詞の表現体系の変容

以上で見てきた現象を、方言接触のパターンという観点から考察してみたい。

日高（2016 予定）では、共通の言語文化圏の範囲内にある方言間では、文法項目などの体系的な言語項目においても、接触による方言変容が生じ得ることを見た。一方、たとえ隣接する方言同士であっても、両者がもともと持っている表現体系の多くが異なっている場合、接触による

伝播・受容は生じにくい。その意味で、たとえば現在の岡山方言と兵庫方言の境界は「壁」が厚く、近畿中央部で生じた新しい言語現象も、兵庫方言域までは広がるが、岡山方言域にはなかなか伝わらない、という現象が認められる。

ただし、こうした方言区画上の「壁」は、時代ごとに変動があったものと考えるのが自然であり、また、当該の言語現象が発生してからの時間的な経過によっても、伝播が可能になる範囲は広がり得ると考えるべきであろう。

授与動詞の表現体系の変化は、中央語（京都語）においては、中世期以来の長期にわたって進んできたものである。「中央部」（京都）から「周辺部」へのことばの伝播・受容の過程も長期にわたる。こうした長期にわたる言語変化（内的変化）と言語接触（伝播・受容）の関係を読み解く場合、現在の方言間に認められる「共通の言語文化圏」というものを、そのまま各時代にあてはめることはできないだろう。現在の地理的分布の範囲から、当該表現が発生・伝播した各時代の共通の言語文化圏を予測するしかなく、授与動詞の表現体系については、現在の〔ヤル／クレル〕使用地域が共通の言語文化圏にあった時代に、「中央部」（京都）から広がった言語現象であると考えておく。すなわち、現在の〔ヤル／クレル〕使用地域は、かつては共通の言語文化圏にあり、「方言 X（近畿方言）のほうが方言 Y（中四国方言）よりも優勢」かつ「表現体系 x（〔ヤル／クレル〕）のほうが表現体系 y（〔クレル／クレル〕）よりも複雑」という（4c）タイプの方言接触が生じたとき、言語的な動機づけよりも社会的な動機づけが有意に働き、複雑な表現体系〔ヤル／クレル〕が、当該の共通の言語文化圏の範囲に広がったものと見ておきたい。

一方、現在の共通の言語文化圏の範囲を考えると、九州地方と中部地方以東の方言には、それぞれゆるやかながらまとまりがある。〔クレル／クレル〕使用地域であるこれらの方言に、〔ヤル／クレル〕が伝播したとき、九州地方においては、より単純な〔クレル／クレル〕が維持され、あるいは〔ヤル／クレル〕を受容する際にも、表現形式の受容にとどまっている。これは、隣接し合う九州方言と中国・四国方言の間に、相互に社会的威信を感じるような優劣関係がないことも要因となっているものと思われる。

中部地方以東においては、東海・関東（首都圏方言含む）の優勢な方言が〔ヤル／クレル〕使用方言であることにより、〔クレル／クレル〕使用方言に対して影響力を持つものと考えれば、表現体系としては複雑な〔ヤル／クレル〕が〔クレル／クレル〕に受容されていくことも説明できよう。ただし、その受容は、在来方言の表現体系を外来方言の表現体系にそのまま置き換えるというのではなく、B型のような、在来方言の表現体系と外来方言の表現体系を組み合わせた新しい表現体系を生じるものとなっている。ただし、こうした混交体系も、東北地方の方言には顕著には認められない。東日本方言のなかでは、中部・関東方言が近畿方言の影響を長期間にわたって受けた共通の言語文化圏の範囲内にあり、東北方言はその影響を直接的に受けていない、という関係性が読み取れる。これを図示すると、図5のようになろう。

共通の言語文化圏				
隣接方言		近畿方言	中部・関東方言	東北方言
表現体系		複雑	単純	単純
遠心性 授与動詞	本動詞	ヤル	クレル	クレル
	補助動詞			
求心性 授与動詞	本動詞	クレル	クレル	クレル
	補助動詞			

↓

共通の言語文化圏				
隣接方言		近畿方言	中部・関東方言	東北方言
表現体系		複雑	混交体系	単純
遠心性 授与動詞	本動詞	ヤル	クレル	クレル
	補助動詞		ヤル	
求心性 授与動詞	本動詞	クレル	クレル	クレル
	補助動詞			

図5 接触による授与動詞体系の変容現象（東日本）

5. おわりに

授与動詞の表現体系は、「中央部」の方言が複雑な表現体系を発達させており、「周辺部」の方言は単純な表現体系を維持している。両者の接触地域では、「中央部」の複雑な表現体系が「周辺部」に伝播し、「周辺部」の単純な表現体系はその影響を受けて変容を生じている。その変容は、「中央部」の表現体系をそのまま受容するというものではなく、単純な表現体系が複雑な表現体系の「侵攻」に抵抗するかのようになり、一部に単純な表現体系を残したまま、複雑な表現体系を組み込むという混交体系を生じている。

ここで見てきたことを一般化すると、複雑な表現体系が伝播するとき、それを受容する側の方言には、在来体系と外来体系の混交体系が生じる場合がある、ということになる。接触による方言変容の諸現象の一例と言えよう。また、このことは、方言分布形成において、接触によって生じた地理的分布が存在することを意味している。方言分布形成を考えるにあたり、「中央部」からのことばの伝播とともに、「周辺部」におけることばの受容のメカニズムを解明することによって、より実態に即した精緻な現象の把握につながるものと思われる。

参考文献

- 日高水穂（1997）「授与動詞の体系変化の地域差—東日本方言の対照から—」『国語学』190:（左）24-35。
 日高水穂（2002）「言語の体系性と方言地理学」馬瀬良雄（監修）／佐藤亮一・小林隆・大西拓一郎（編）『方言地理学の課題』165-178。東京：明治書院。
 日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』東京：ひつじ書房。
 日高水穂（2008）「方言形成における「伝播」と「接触」」山口幸洋博士の古希をお祝いする会（編）『山口幸洋博士古希記念論文集 方言研究の前衛』425-442。富山：桂書房。

- 日高水穂 (2016 予定) 「接触」による方言分布形成」大西拓一郎 (編) 『空間と時間の中の方言』東京: 朝倉書店.
古川俊雄 (1995) 「授受動詞「くれる」「やる」の史の変遷」『広島大学教育学部紀要』2(44): 193–200.
国立国語研究所 (編) (1967) 『日本語地図 2』東京: 大蔵省印刷局.
国立国語研究所 (編) (2002) 『方言文法全国地図 5』東京: 財務省印刷局.
国立国語研究所 (編) (2006) 『方言文法全国地図 6』東京: 国立印刷局.
森勇太 (2011) 「やりもらい表現の歴史」『日本語学』30(11): 28–37.
大西拓一郎 (編) (2016 予定) 『新日本語地図』東京: 朝倉書店.

Metamorphosis of the System for Verbs of Giving through Dialect Contact: From the FPJD Survey

HIDAKA Mizuho

Kansai University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

When expressing the lexical system of Japanese verbs of giving as the giving verb of centrifugal direction from a speaker or the giving verb of centripetal direction to a speaker, [kureru/kureru] are maintained in the peripheral dialects used in the east of the Chubu region or in the south of the Kyushu region; however, the lexical system of [yaru/kureru] has been maintained in the central dialects used in the Kinki region. In regions where this [yaru/kureru] makes contact with [kureru/kureru], there are cases where an opposition of [yaru/kureru] occurs in the usage of the auxiliary verb; however, [kureru/kureru] is maintained in the usage of the main verb. Various phenomena of metamorphosis through dialect contact in the system of verbs of giving and their geographical distribution have been investigated through the results of the Field Research Project to Analyze the Formation Process of Japanese Dialects (the FPJD survey).

Key words: verbs of giving, *yaru*, *kureru*, dialect contact